

ナローボート巡航記 (運河の旅) No. 7 (28/Sept/2007)

クルーズ五日目 (2006年9月6日・水曜日)

今日はいよいよこの Llangollen 運河の終点に至るルートです。昨夜の停泊地 Trevor は右の欄外すぐの所。これから Llangollen 迄は、昨日アクエダクトでまたいだ谷川に沿って進みます。川の名はリバー・ディー(River Dee)。



ちょっと見にくいですが、画面中央付近青ジョッキの下方に River Dee と書いてあるのが分かると思います。またその右下の Vale of Llangollen は、はっきり見えますね。vale は valley と同じ、谷・谷間などの意味、地名として使われるほかは詩語で、口語では使わない単語らしいです。

図上では River Dee は水色が薄くて分かりにくいと思いますが、画面の上も下も山地で、その間を運河と川がつかず離れず進んでゆく様子は分かりますね。そして運河に沿って良く見て行くと所々に NARROW と書いてあります。その辺りでは狭い運河がますます狭くなり、すれ違う時にお互いに舷を擦りながらという状態になることもしばしばです。もちろんそんな時は最小スピードで進みます。



上の地図の中央少し右、水色の帯が途切れた所がこの運河の終点です。

運河終点の拡大円の中に **Mooring basin** と書かれてますが、ここは係留棧橋完備の公共マリーナで係留無料、給水設備もあります。すぐわきをしょっちゅう他のボートが通過する運河の岸に舫うよりずっと快適です。

終点の先にも古い水路は残っているようですがまだ復旧整備が進んでおらず、一般のボートが進入できるのは今のところここまで。けれども、地元観光業者が運航する乗合観光ボートはもう少し先まで行くことができますようです。私達がマリーナに泊まっている間、何回かそういうボートを見かけました。

この地図の右端にも **NARROW** と書いてありますが、こういう所は狭いだけでなく、水深もごく浅く、水路の端によると底を擦って止まってしまうことも度々。

だから、反対からくるボートをやり過ぎるときは特に要注意です。

別の地図には **narrow and shallow** と書いてありました。

運河の右手（北側）は山地がせまっていますが、その中でひとときわ高いのが上の地図の右上に **Castle Dinas Bran** と書いてある山。

この山はかなり離れた所からもよく見えていました。



頂上に見えるのが地図に出ている **Castle Dinas Bran** です。

城と言っても現在あるのはその **remains**=残骸、即ち城址ですが、こんな山の上によくぞこんな石造りの城をきずいたものですね。

スペインなんかでも古城というと、ほとんどこれと同じような山のでっぺんで、しかもその周辺には大抵は古い町並みも残っていました。経済力もさることながらよほど強大な権力無くしては不可能なことですね。中世の権力者はいずれも政治・経済・軍事・宗教のすべてを一手に牛耳っていたに違いない。

現代の政治家にはあってはならぬ強権・・・。



反対側、進行方向の左手(南側)も Dee 川の谷をはさんでこれまた小高い山が続いています。昨日までののっぺりした田園風景とは大違い。運河とディー川の高低差は Llangollen に近づくに従って少しずつ小さくなって行きます。川の上流と下流には必ず何らかの高低差があるし、反対に運河水面はロックがない限り変化しないのだから当然そうなるわけですね。



こうして運河は右手の山裾を縫うように進み、やがて終点の Llangollen の町に差し掛かります。Llangollen はこの運河の沿線では随一の観光スポットらしいですが、観光客が押し寄せたらすぐあふれてしまいそうなほど、町はごくこじんまりしています。土曜日出発ですぐこの辺へ向かっていたら、多分運河も町も混雑していたのだらうと思います。ムアリング・ベイスンは運河の終点を右に折れた所にあり、この日は閑散としていました。



これがムアリング・ベイスンの一角ですが、写真の右側のボートをよく見て下さい。キャビンの屋根の上に植木鉢が置いてあったり、雨が降っても操船者が濡れないように囲いをつけたりしてありますね。この船のオーナーがそうかどうかは知る由もありませんが、これが年金生活者などが住居としているプライベート

・ボートの典型です。左は貸ボート、違いは歴然です。

夫婦二人で生活する分には必要にして十分のスペースと設備を持ち、ボートを綺麗に維持して、多分イギリス中の運河を、夏は北、冬は南に移動しつつ楽しんで

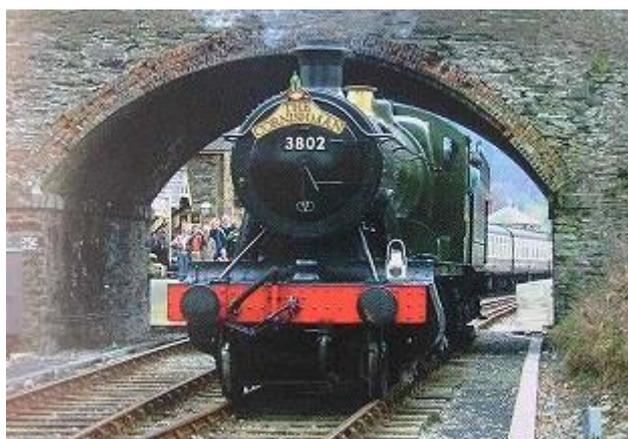
いるのでしょう。うらやましい、の一語に尽きます。年末ジャンボにでも当たらなければ、逆立ちしても私たちには出来ない芸当です。

でも万が一、いや億に一、と言うべきか、とにかく前後賞も含めて大当たりしたら、ナローボートじゃなくて、北海やドーバー海峡を越えて大陸側の運河にも行けるダッチ・バージと呼ばれる少し幅の広いワン・サイズ上のがいいナー。それならUKのブロード・チャンネルだけでなく、アイルランドや欧州大陸全域をカバーできる。バルト海や黒海や地中海にだって運河と河伝いに行けるんです。

今日は走行距離が短かく、途中なんの障害もなかったもので、昼にはこのマリーナについてしまいました。 昼食後、たまった洗濯物をもってコイン・ランドリーを探しに行きました。旅の最中に洗濯ができるなんてのもこのクルーズだからこそ。洗濯物を放りこんでおいて、食料と水物の買い出しをしたり、町の見物をしたり。 町は特にどうということはない谷川沿いの小奇麗な田舎町。一時間あれば徒歩で全部回れてしまいます。

洗い上がって乾燥も終えた洗濯物と買い込んだ食糧を持っていったん帰船。今日はこの町から川の上流に向けて走る小さな蒸気鉄道に乗ろうと思っていました。 天気が良ければ、鉄道の終点からもっと上流の遊歩道散策も面白いらしいんですが、あいにく私達が始発駅につく頃には雨模様になってしまいました。

こんな蒸気機関車にひかれて走る列車です。





この通り始発駅 Llangollen から、終点 Corwen まで停車駅は全部で六ヶ所という短い鉄道です。現在は貨物や旅客輸送手段としての実用的価値はほとんどなく、観光目的のみでの運行なのでしょう。

路線図の太い黒線は River Dee、始発駅の次の Berwyn 駅のすぐ上で途切れている灰色の線が運河で、その運河の終わった所にボートを舫ってあります。

左上隅の Rheilffordd という綴りは断じて英語ではありませんね。これは右肩の英語、Railway に相当するウェールズ語なんです。

まあ、これなんぞは発音は別として意味は何となく推測することも可能ですが、図の中央にある四つ目の駅、この駅名はちょっと手ごわいですよ。



この駅を通過したときはあいにくの雨ではっきりした写真が撮れませんでした

この駅名表示は右のようになっていたんです。これぞまさしくウェルシュ。

このネーム・プレートは終点の駅の売店で売っていたんですが、駅名そのものがお土産になっちゃうのは「幸福駅」だけではないんですね。

ドーダ、読めネーだろ、というわけ。

こんなスペルは普通の英国人(British)にだって簡単に読めるものではない筈。English や Scottish は勿論、当の Welsh だって今では全員が読めるとは言えないのではないかと思います。YはIに読み替えるとしても、それだけじゃ解決しませんね。省略符も付いてないのでこれがフル・スペルなのでしょうが、母音をいくつか入れたくなってしまう。



これは始発駅 Llangollen のプラットフォームと街並。一段高くなっている所は、Dee 川を挟んだ対岸で、そちらが町の中心、運河は撮影者の後方にあります。前の駅名を見たあとでは簡単至極にも見えてしまうこの駅名。これだって辞書で

見るとなかなか手ごわいんですよ。発音記号の入力の仕方が分からないので敢えてカナ表記すると、(ウ)ランガ(ウ)レン、(ウ)ランガレン、ランゴ(ス)レン、(ス)ランゴ(ス)レン、など色々です。(ウ)は(h)、(ス)は(th)の発音です。

この地名はリーダーズ英和に出ていたのですが、前の駅名を引いたらそれに近いもので **Glyndwr** というのがあって、カナ表記ではグリンドゥールとしてありました。これはどうやら人名らしい。

こんな難しい言葉だから殊更に意識しないと段々すたれてしまうらしく、ウェールズでは毎年夏になると **Eisteddfod**(アイステズヴォード?) という、ウェールズ語だけの音楽・演劇・吟唱詩の集いがあちこちで順次開かれるのだそうです。これはウェールズ語の保存・普及のために行われるのだそうで、ウェールズだけに限らず、イングランドでも開かれる事があるそうです。

ところが、この **Llangollen** では、逆に英語(イングリッシュ)による同名の音楽と民俗舞踊の祭典が開催されるというからややこしい。この地方にはウェールズ語が根強く日常に浸透し、生き残っていて、逆に英語を日常語としている人にウェールズ独自の文化を理解してもらおうという狙いかも知れません。

この地名がリーダーズ英和に出ているくらいだから、ウェールズではそれだけ知名度のある場所なのでしょう。

私たちは常日頃、英国(UK)のつもりで簡単にイギリスと言ってしまってますが、イングランド以外の、スコットランド、ウェールズ、ノーザン・アイルランドなどは断じてイギリス(**English・England**)と言うべきものではなく、差し障りなく英国を表すにはやはりUKとしか言いようがないんでしょうね。

現地でサッカーやラグビーの各国代表戦を観戦する時などは、特に夫々のサポーターたちの気に障らないように正しくチーム名を呼ばないと危ないかも……。何しろ名にし負うフーリガンの国ですからね。スコットランド代表チームは断

じてイギリス(イングランド)のチームではないし、ウェールズとノーザン・アイ
ルランドも同じUK国内ではあっても、あくまで別の代表チームです。



私達が汽車に乗り込んだ頃からとうとう本格的に降り始め、乗っている間中降り
続いていました。終点から少し足を延ばして近くの滝まで自然遊歩道を歩いてみ
たかったんですが、やむを得ず中止。 終点駅の売店やティールームで時間をつ
ぶし、そのまま次の列車でとんぼ返りでした。車窓からはこんな風に常にD e e
川が遠く近く見えていました。

Llangollen に帰りつく頃にはいい塩梅に雨も上がりボートへの帰り道には傘は
いりませんでした。 とにかく北の天気は変わりやすく今晴れていたと思ったら

突然の雨。降られると覚悟しているとまたカラリと晴れたりします。

日本では、弁当忘れても・・・という警句が生きている地方もありますが、イギ
リス人は、オット、ウェールズ人もあまり傘はさしてませんねー。例の山高帽に
こうもり傘はロンドン紳士の単なるアクセサリーだったみたいです。



再びマリーナ風景。真ん中のブルーの船体が私たちのボート。

並んでいる窓は船首(右手)から、ダイニング、ギャレー、ダブル・ルーム、トイレ(丸窓)、ダブル・ルーム、トイレ・シャワー(丸窓)、ツイン・ルームの順。

今日は歩き疲れたし、食料もたっぷり買い込んだので、今夜は外メシはやめて、また船内酒盛り。船内なら呑みながらでも寝ちゃえるのがミソ。周りのボートも大騒ぎはなく、ムアリング・ベイスンの夜は静かに更けてゆきます。

では、この続きはまた今度・・・。
